九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

政治史と文化史との聯關

堀, 豊彦
九州帝国大学教授

https://doi.org/10.15017/1208

出版情報：法政研究. 13 (4), pp.1-59, 1944-03-31. 九州帝国大学法政学会
バージョン：
権利関係：

政治史と文化史との聯關

堀　豐彥

一

いまくらゐ歴史に對する關心の昂まれる時代は稀有であると考へられる。『歴史』とか『世界史』とかいふ言葉が以前とは比較し難い程しばしばわれわれの耳目に觸れるやうになつてきた。そして哲學者の間においても歴史哲學が中心的なるものとして採り上げられる傾向が益々多くなりつつある。これはとりわけわが國の哲學界において特に顯著なる現象であるものの如く、茲では現在が、いひ換へれば歴史的現實が中心課題として採り上げられてゐる。この現象は現在の緊迫せる世界情勢が人々の關心を超越的な課題よりもより切實により力強く現實の歴史的實踐の世界に向かつて惹きつけるものがあるからであらう。このやうな事情は大なり小なりに世界各國に一般共通な現象であつて、特にひとりわが國に限られたことではないが、それにしてもわが國においてこの傾向が特別に顯らはに著しく觀取せられるおもひの深いのは、蓋し現在わが國の置かれてゐる世界史的況位に基因するものであるであらう。ひとりわが國のみならず、アジヤ的世界が世界史的立場において自他共に人々の關心を蒐めるようになつたのは、まことに近時のことであつたが、それにも增して考へさせられる點は、われわれの

立場が世界史的立場において漸く顯らはに世界の視瞳を惹き初めたと思ひなされるに至つたとき、はやくもわれわれは世界史的動搖並に轉換の形相を身を以つて体驗しなければならない立場に立つてゐることを自覺せねばならなくなつたことである。われわれは歷史的世界の巨いなる歩みを深く感じないわけにはゆかない。斯様な時代的要請に加ふるに、わが國にありて培はれてきたところの瞑想的な內在的絕對觀を基底とする哲學的傳承が共働して、現在わが國において特に顯著に哲學的歷史觀を規定してゐるものと思はれる。

この様に哲學の志向や人々の關心が現實に向けられるに從つて、哲學そのものが現實的なものとなる傾向が生ずるのは蓋し止むを得ないところであらう。現實を對象とする哲學はそれ自身現實であらねばならないか否かは自づから一つの問題であるが、現實についての哲學がやがて現實を地盤とする哲學となりゆくといふやうなことは、蓋し自然の勢ひといふべきであらうからである。ところで何が現實であるかといふことに關しては、時代によつてその把握の仕方に異同があるのは免れないところであるが、とかく政治的なるものが中心的意義を持つ今日の時勢においては、現實について思惟する哲學が次第に政治的色彩を濃厚にするに至り、政治的色彩に富む哲學にして始めて現實性をもつと考へられるに至るといふこともまた自然なことである。(1) 今日の如き世界史的轉換の過程にあつては、あらゆる方面が現實性の問題に對して夫々の立場において新たなる課題を擔はされてゐることを自覺して立つてゐるわけであるが、哲學そのものが歷史の立場において現實の論理的構造を抱握しやうとしつつあるといふ事實は、政治や國家の問題といふが如き課題を直接その認識對象として立つところの政治

學や國家學にとつても止目すべき現象であり、且つまたかくあらねばならない。端的に言つて世界史の現時的階梯における中心課題を自らの立場に即して研究對象として關與してゐるところの政治學や國家學であるだけに、このやうな現代哲學の有力なる動向からの影響は廣汎であり、また深甚である。由來哲學と政治學並に國家學との聯關について一般に客觀的見解が存立してゐるわけではないが、わたくしの見るところでは政治學や國家學がその中において自らの淵叢と生成とを得てきたものは古典的ギリシヤ哲學であつた。もとより本來普遍科學としての哲學の對象や任務は、哲學以外のすべての科學のそれとは相違して居り、後者の如く特殊的なる對象を有し且つ斯かる特殊的對象の研究がそれら諸科學の專らなる任務であるといふのとは寧ろ對蹠的であつて、特殊的對象ではなくして一般的な夫れであるといふことはいふまでもない。しかしかく特殊的なるものではなくして一般的なるものが哲學の課題であり任務であるところに哲學が科學一般に對して基礎であり、また基礎たり能ふ所以が存するわけであつて、これは更めて說くまでもないことである。茲に一般的に觀て哲學の課題が、別してその動向が爾餘の科學一般に及ぼす影響の廣く深き所以が存するわけであるが、このことは上記の如くその學の成りたちや性格から考へて、政治學や國家學にとつて特別に廣汎な深刻なる影響を生ぜしむる事由とせられる所以である。とりわけ現代哲學が在來のそれの如く純粹認識の形式にのみ係りをもつといふのではなく、現實的な實存がその認識內容を規定するといふ實存哲學として發展してゆくものであると解するならば、現實性の問題が政治的なるものを中樞的とする傾向が次第に濃厚になりつつある今日においては、現時政治學が哲學の志向にとり

わけ顯著な深い影響を享くることのあるのは寧ろ自明なことである。さうして本來理論の立場に即する政治學とはまた別箇に、もともと史觀のうちに自らの立場を占めるところの政治史が歷史的現實性の問題に對して深き關心を惹かるるといふことは、更に更に多言を必要としないことであるばかりか、政治史の立場にとつてはこれは決定的に重要なる聯關をもつことであるといはねばならない。

(1) 高橋里美敎授　包辯證法　九三—九四頁（昭和十八年三版）參照

そもそも政治と歷史との聯關、ひいては政治學と歷史學との聯關のこまやかさは、優れたる政治學者からも亦歷史學者からもつとに指摘せられてゐる。譬へばイギリスの政治學會の代表學者シーリー(Sir J. R. Seeley)の有名なる句として『政治學を缺げる歷史學は何らの結實を持たず、そして歷史學を伴はざる政治學はその基底を有たない』(2)といふ句は多くの人々のよく知れるところのものである。このことは第十九世紀ドイツ歷史學派初期の代表者ランケ(L. v. Ranke)によつても明快に說述せられてゐる。即ち政治は歷史的知識なくしては成りたち能はず、歷史は政治的知識なくしては成立し得ないといふ程に政治と歷史との間には密接なる聯關性が存すると彼もまた說述した。尤もこの場合、ランケは政治と歷史とのこのやうにも緊密なる聯關を認めつつも、なほこの兩者は明確に區別せらるべきことを論ずることを忘れなかつた。彼においては歷史は本質上普遍的であらねばならず、これに對して政治は國家に纏はつて成りたつものであるところから國家の政策に影響せられ、從つて政治には客觀的たることを期し難いものがあり、結局政治は科學的立場に立ち難いといふ風に說かれたことであつた。(3)

茲にはわれわれから觀れば、政治の概念につける、いひ換へれば政治と國家の聯關につける彼の理會の狹さと淺さとが觀取せられるが、今はその様な點には觸れないことにする。そしてただ政治と歷史との緊密なる關係についてしばしば學者が論證することがあるといふことにつける典型的なる事例としてこれらを指摘するに止める。

(2) Sir. J. R. Seeley, Introduction to Poitical Science, 1896, pp. 3—4.

(3) L. von Ranke, Über die Verwandtschaft und den Unterschied der Historie und der Politik, 1886.

II

およそ歷史が問題とせらるるとき、歷史の意味の理會は人々によつて種々に異り、必ずしも一定してゐるわけではない。普通の見解に依れば、歷史とは過去の出來事か或はこのことにつける言語的表現である。ドイツ語のGeschichte は geschehen「生成する」から出でたる語であり、英語の History はギリシヤ語のヒストリア (historia) に由來してをり、ヒストリアはヒストール (histor) 即ち「目擊者」の語に關聯して居るといはれる。このやうな言語的表象に基いて歷史のもつ意義は普通二樣に區別せられてゐるが、いづれかと言へば歷史とは過去に生起したこと乃至過去において爲されたこと、行はれたことといふ意味が強調せられ易く、歷史における實踐や行爲を強調する人々の間においても歷史の過去的性格を重要視する向きが強いかに思はれる。(1)

(1) 高橋里美教授　前揭書　九七頁參照

歷史の感覺の極めて鋭さを示したヘーゲルはその「歷史哲學」の序說の中で歷史の意義をこの語の有する主觀的並に客觀的の二面に分別して示した。即ち、歷史といふ語は客觀的には『出來事』(res gestae)そのものを意味し、主觀的には『出來事の叙述』(historia rerum gestarum)を意味する。前者は事實そのものであり、後者はこれに反して事實そのものとしての歷史についての認識であり、且つその認識に即しての叙述である。更にいひ換れば、前者は事實として生起したことといふ意味における歷史であり、後者はそれについて物語られたるもの乃至それを書き記したるものといふ意味においての歷史である。(2)

(2) 三木清氏　歷史哲學　一一二頁(昭和七年)においてはこれを『存在としての歷史』と『ロゴスとしての歷史』と二分して說明されてゐる。

歷史につける考察を試みる場合、歷史におけるこのやうな二つの概念を明瞭に區別しておくことが必要でありまた肝要である。そして歷史につけるこのやうな二つの概念や見方の區別は何人にとつても極めて明瞭なことであるやうに思はれるが、しかし通常それが充分に行屆かないがために思想の不精確や混亂を惹起することも決して稀ではない。實際、歷史は事實として生起した事象であつても、それは必ずしもつねに書き記して傳へられるものとのみは言はれず、書き記して傳へられざる歷史もまたあり得るのであつて、歷史に關するこの二つの概念の意味する夫々の事象の間には或る距離が存することが、こゝからして理會せられる。しかし、このやうな或る距離はもとより二つのものの關係の一面である。なぜならば、「歷史」といふ一つの語が歷史の有する二つの概

念の表象するものを自ら結合して内含するものとして表はされてゐるやうに、上示の歴史の二つの面の間にはまたその關係を統一する關係が存立するものであることを理會し能ふ可きであるからである。しかしながら、それにしても歴史につける二つの相違せる概念の表象する事象の間には或る距離が存在するものであるといふことは概念上は假りに容易に理會し得るとしても、事實上これを如何に取扱ふべきかはしかく安易なことではない。即ち、この二つの事象の媒介は相當困難なるものであるやうに思はれる。

さきに歴史は一般には歴史の研究對象とされるとき過去的性格を帶びるものであるといつたが、歴史とは單に過去に生起したことばかりであるのではなく、現在にも生じつゝあることであり、また未來にも生起するであらうことである。かやうな意味で歴史は時間に係はるものであり、時間もまた生成に係りあるものであつて時間的生成といふことが歴史の根本的規定をなすものである。(3) 既に明かである如く現在は過去に對する否定でありながら、現在はありとあらゆる過去の要因に影響せられ制約せられつつも過去とは自づから區別せられて存立する。他方現在そのものはながく現在として之を捉へ得てあり能ふものではなく、現在はつねに過ぎゆかうとするものである。しかも現在は未來からは區別せられてあるべきものでありながら、之を捉へ得たとなすときには將に未來によつて迫られつつあるものである。實に過去が現在なくしては考へられないやうに、現在はまた未來なくしては考へられないのである。かやうに未來は現在のうちに働かなければならない。かく考へきたれば現在は單に過去からのみならず未來に依つて限定せられ規定せられるものであると言はなければならない。時間は斯樣に分

り難いものであるが、しかしその理會は過去、現在、未來の分析を手懸りとして進む以外には由ないのである。

(3) 高橋里美敎授　前揭書　九八頁參照

そこで時間を考へる場合、時間はただ過去から現在を經て未來へと向つて流れゆくものといふ風に一方的に連續的なる一筋の流動としてのみ表象するわけにはゆかず、却つて時間は未來から現在を經て過去へと移りゆくものといふ風に考へることも可能であり得るであらう。更にまた古くアウグステイヌスが語れるが如く、人は現在において單に現在を有つのみならず同時に過去も未來をも有つてゐるものであるといふことも亦時間について成り立ち能ふ解釋であるであらう。茲では人は過去の現在、現在の現在、未來の現在を有ち、過去も現在も未來もともに現在のうちにおいて在ると考ふべきなのである。(4)

(4) Das Heiligen Augustinus Bekenntnisse, Übtrg. von H. Hefele, S. 243.

彼の謂ふところの現在は過去や未來に對するものとしての現在であるのではなく、それは現在なるもののうちに過去も現在も未來をも內含する現在といふ意味であるであらうが、われわれは今彼の謂ふ現在の意義を深く詮索する要はないのであるが、茲において考へさせられることは、彼の謂ふところの現在は自づから時間を超越したるものであるといふことである。斯樣にして時間は茲において明かなる如く永遠なるものに連なつてゐる。それ故にこそ人はつねに過去に歸りゆくことも、また未來に馳せ參ずることも可能であり得るのであると言ひ得ら

れるのではあるまいか。實にわれわれが歴史の連續を逆に辿るまでもなく直接に過去に歸りゆき能ふのは時間が永遠なるものに連なり係はつてゐるものであるからではあるまいか。それ故にこそ、過去は過去として現在に對して獨自の意義を有し得るのであり、現在が單に過去の凡てを包み有するのではなくして、過去はまた偏に現在の內に包攝し盡し得られない別箇の獨自の意味を有するものであると考へ能ふのである。このことはまた未來に對しても同斷であらう。未來は單に現在の發展のみであるのではなく未來には未來としての獨自性がある。蓋し未來を規定するものはひとり過去及び現在であるのではない。したがつて未來はなほ未來としての獨立の獨自的意味を有ち能ふわけである。かくの如くわれわれは過去と未來とが現在を越へ得るものであること、さうして時間は總じて永遠なるものに連つてゐることを確實に知り得るのである。(5)

(5) 高坂正顯教授　歴史的世界　一九—二八頁（昭和十三年三版）參照

茲において歴史の理會に關して歴史の意味につける解釋が課題となる。たとへば歴史的過去に關し過去の意味を理會せんとして、之を偏に現在の意味においてのみ解釋して捉へやうとするが如きことがあるとするならば、それはよく過去を生かし得る所以ではない。既に述べし如く過去はその凡てをおしなべて現在に包攝せられてあるものではなく、過去には過去として現在がよく攝しおほせざる獨立の獨自的意味が備つてゐるものであるからである。このことは現在及び未來に關聯しても均しく同樣であるべきことは上述のところによつて既に容易に論

結し得らるであらう。茲に歴史に對する解釋が問はるべき場を有する。解釋の問題としては最も基本的に解釋の仕方が課題として採り上げられなければならないであらうが、惟ふに解釋が問ひ正さるるとき解釋に先行して討ねらるべきものは畢竟われわれの觀念の媒介といふことであると思ふ。

極めて分りやすくいつて歴史的存在は歴史の研究對象とされるとき一般的には過去的性格を有するものとして觀想される。いまこの視角から事体を眺めるとすれば、過去とは現在においては既に人々の前には存在してゐないものとひろく考へられるものとなし得るであらう。斯様に既に眼前に存在してゐないものに對して如何にして事實性を賦與するかといふことが當然に生起する課題であるであらうが、それは觀念の媒介としてこれを再現現出せしめる外に方法はないと言はなければならない。このことは過去と均しく未だ眼前には存在として顯はれ來たらざる未來に對しては言ふまでもなく、現に人々の前に存在してゐるものとして考へられるところの現在についても實は等しく妥當する。われわれは歴史的事象そのものを直接自からの感覺的經驗に訴へて觀ることは出來ないのであつて、どうしてもわれわれの觀念の働きを媒介としてこれを再現し、その諸々の關係を表現して觀るといふことより他に路をもたないのである。かくしてつひには歴史的認識を成り立たしめるのであるが、斯く言へばとて歴史とは畢竟觀念の所産であるとか乃至は單に主觀的思想に過ぎないとかと論結せられおほすべきものではなく、また實に斷じて斯くの如きものであつてはならないのである。

この場合觀念とは眞に公正無私であつてよく客觀そのものを把握し得たものであらねばならない。そのことは

まことに困難を伴ふことであるが、それとてもなほわれわれの觀念を媒介として現實に再現するのでなければ之を把握することは本來出來ないものであると考へられる。茲に歴史的事象そのものが人々の眼前の事實として之を感覺的經驗に照らしてみることの可能なところの自然科學的事象とは著しくその趣を異にする所以のものが存する。この故に歴史的事象とそのものについてのわれわれの觀念の仕方との關係は極めて内面的である。とりわけ或る事實と他の事實との關係に至ると一層そのものとわれわれ自らの觀念との關係は複雜となり、したがつて兩者を夫々實際において區別することはまた一段と難事となるわけである。蓋し歴史的事象はわれわれの認識を限定し、他方認識の仕方はまた歴史的事象を限定するといふ關係に立つであらうから、この關係は相互的且つ内面的であると言はなければならない。茲において更に想をひろめて考ふるに、兩者の關係は斯く相互的ではあるが、しかしまた其間に存在から認識が出て來るものであつて結局においては認識そのものはこれまた存在の一つの仕方に外ならないのであり、諸々の認識形態はその内容であるところの存在そのものの内實乃至その特徴にしたがつてつねに規定せられて與へられるものであるといふことが言はれ得るであらうと思ふ。われわれは歴史的事象の理會に關する歴史的事象そのものの意味に對する解釋といふ課題を前にして、歴史的認識の性格とその構造とをその正しい態容の下において理會し把握しなければならないと思ふのである。

およそ歴史が索ねられ歴史が究められやうとするとき、基礎的であり且つ決定的なる問題は史料に纏はる諸々の問題であると思ふ。これが次に起るべき課題であるであらう。しかし歴史的認識並に歴史解釋に關して史料に

經はる數々の基本的問題はこの小稿の範圍外に屬する。上示の歷史のもつ二面に即して事理の示すところに從へば、歷史においては『出來事としての歷史』は『出來事の敍述としての歷史』よりも先行的であらねばならないが、歷史敍述の立場からして考ふれば、このことは必らずしもつねにしかく承認せられるとは限らない。多くの場合歷史敍述は出來事をそれが現に行はれてゐる間にあつては直接的に觀察し得ないで、却つてしばしばそのものの殘して行つた痕跡によつて考究することによつて之を寧ろよりよく間接的に理會し能ふものである。このやうな痕跡が史料と稱せられてゐるが、史料はこれによつて出來事を知らしめるといふ意味からしては却つて歷史敍述としては發足點であるとさへ言はれても差支へない場合さへあり得るであらう。(6) したがつて歷史研究や歷史敍述にとつての史料の重要性や基本性に關しては多言を要さず、特に歷史學における史料の重要視は史料批判の重要視と共にますますその重要性を增し加へきたつたことであつた。かやうにして史料の批判的研究方法がニーブール（Niebuhr）以來その秀いでたる後繼者より成るところのドイツ歷史學派においていよいよ確立せられたのである。(7)

（6）三木清氏　歷史哲學　三一四頁（昭和七年）參照

（7）坂口昂敎授　獨逸史學　一九七—一九八頁（昭和七年）

しかしニーブールの缺陷として批判的に指摘せられるところは其餘りにも堅き史料への執着信賴であり、(8) 更にまたその謂ふところの批判的方法とは史料の取扱についての批判的方法であるにすぎないのであつて、それは進

んで歴史そのものへの批判を意味するものではなかつた。この點はベルンハイムの見解についても均しく語り得るところである。(9) しかしながら史料の取扱やその批判的研究方法の使用がいかに精確であるとしても、それをもつて直ちに歴史的認識の確實性は期し能はない。歴史的認識が史料に依存するところが甚大であることは認められるとしても、そのもの自体は直接的にまた全幅的なる意味において歴史的對象についての認識であつて、そのことは單に史料からのみ由來するものではないからである。われわれは單に史料へ對しての取扱、ひいてはその理會、並に史料へ對する批判にのみ止まるばかりではなく更に進んで歴史そのものへの認識並に批判へと進みゆかねばよく充全たり能はないと言はねばならない。なんとなれば史料は上來述べたやうな意味において單に歴史的認識の對象に對する手懸りであるにすぎないものであるからである。(10)

(8) 坂口昂敎授　前揭書　一九七頁

(9) E. Bernheim, Einleitung in die Geschichtswissenschaft, 1926, S. 96.（坂口昂・小野鐵二共譯『歴史とは何ぞや』（岩波文庫））一二四頁參照

(10) 三木清氏　前揭書　四―五頁參照
なほ樺俊雄氏　歴史的意識　一三九―一五一頁（昭和十八年）參照

歴史の解釋に關聯して考へられる史料として最も一般的なるものとして擧げらるるであらうものは、文字を以て書き記されし史料としての文獻である。歴史の史料はもとよりこの意味の文獻に盡きるのではなく、試みにべ

ルンハイムがその著『歴史とは何ぞや』(Einleitung in die Geschichtswissenschaft, 1926)において說述せるところをみれば、それは實に多種多様に亘つてゐる。即ち、第一種、直接の觀察と思出(Erinnerung)、そのうちにはその特殊形式として寫眞術と寫音術(Phnographie)を含み、第二種、報告乃至傳承(Tradition)、これには口碑(Mündliche Tradition)、文學による傳承(Schriftliche Tradition)、圖書による傳承(Bildliche Tradition)との三者が擧げられ、更に第三種、遺物(Überreste)として殘留物(Überbleibsel)、即ち狹義の遺物と記念物(Denkmal)との二つに分たれて夫々擧示せられてゐる。しかもこの三種の各種別は夫々のうちにまた諸種の個別的・特殊的なる形式のものを多く包藏して存立するものであることが詳述せられてゐる。(11)したがつて史料と稱してもその形式はまことに多數にのぼるのである。

(11)　ベルンハイム　上揭、邦譯(岩波文庫)一六五頁

かく數々の形式における史料中上示の如き意味における文獻が最も據所ある史料たることは大方の異議のないところである。そこで歴史解釋における文獻の尊重が由來高調せられることは蓋し當然の事理に屬する。このやうなところからして文獻學主義(Philologistentum)とも呼稱すべきものが歴史解釋における有力なる立場を形成し易かつたのである。謂ふところの文獻學主義とは文獻そのものをもつて歴史的事實と自同と考へ看做すが如き立場をかく稱し得らるるであらうと思ふのである。いかにもこの立場にはこの立場としての典據があることは

慥かであつて、輕々にその權威を拒むことは許され難いであらうが、しかしいかに文獻が史料として有力であるとしても、それが史料たる限り文獻はそれ自体もとより歷史的事實そのものではなく、したがつてそれはそれ自体歷史的對象などであらうはづはなく飽くまでもそれは歷史的解釋にとりての手懸り・素材たるにすぎない。そして文獻そのものが文字をもつて書き記され、それによつて直接理會し得る意味を表現してゐるところから文獻の表現してゐるものがそのまま歷史的事實そのものであるかの如き錯覺を生じ易いといふことは看過し難い點であつて、茲にもこの立場に對してわれわれの戒心が備へられなければならない。この立場に根ざし易いこの種の危險に對してはクローチエ（B. Croce）は徹底的なる反批判を加へ、斯様な立場は歷史そのものを生けるものとしてではなく死せるものとして取扱ふとするものにも等しく、歷史の歷史たるは何よりも生ける歷史であらねばならないといふことを力說したことであつたが、彼のこの見解には聞くべきものが宿つてゐる。(12) 勿論クローチエが歷史において强調するところの生命そのものに關しては自づと別箇の解義と評價とがあるべきであつて、彼の立場が歷史解釋の必らずしも唯一の、まして至上のものなどではないことは事更に斷る必要もあるまい。しかし彼は歷史を取扱ふものがとかく文獻のなかに埋もれ易く、そこから派生する弊害に對してそれを鋭く指摘し、いみじくもこれを批判した點をわれわれ評價するに吝であつてはならないと思ふ。

(12) Benedetto Croce, Theorie und Geschichte der Historiographie, 1930, übst. von H. Freist und K. Peters. (邦譯、羽仁五郎譯『歷史敍述の理論及歷史』)

上來述べきたれるところから判明するであらう如く、歷史解釋にあつては何と言つても諸々のものを含みての謂における史料がその典據たるべきことは自明のことであるであらう。就中所謂狹義の文獻が最も有力なる史料たることは既述の如く明かである。斯くして諸々の性質を帶びたる史料に對してこれを適正に取扱ひ、史料において表現せらるるところを正しく解釋することが史學者の任務であるべきことも亦同樣多言を要さない。(13) したがつて史學者に對して求められ期せらるべきことは史料に捉へられて史料の上に出で得ざるの短を爲さざる戒心と共にまた單なる主觀的獨斷に陷入らざる明識である。然るに既に知らるる如く歷史が究極のところ史料の解釋を以て決定的となすものであり、しかもその解釋に携はるものが史學者である限りそこには人として誤謬なきを期し難いものがある。したがつてここには慥かに一定の限度が豫定せられなければならない。そこで歸するところ史學者の良識と良心とに賴らねばならないこととなる。デイルタイにおいても歷史解釋が各個人の仕事に依據するところからして生じ易い相對性を超克し得るものは各人の良心（das Gewissen）であるとして說かれた。またマイネツケ（Meinecke）が歷史の永遠性の價値は究極のところ行動する人間の良心の決定に由ると力說したことも、この意味において考へさせるところが深い。(14)

(13) W. Dilthey, Die Entstehung der Hermeneutik (Gesammelte Schriften Bd. V. 1924. S. 331)

(14) F. Meinecke, Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, S. 21.

以上論述せる如く歷史の理會がもたらされるためには歷史的事實にせよ、最廣義にみたる史料にせよ客觀的な

るべきものに對する解釋に基因し由來するのであるからして、究極において歴史の理會はわれわれの觀念の媒介によるものであり、それ以外に由なきものであると既述した所以が茲に理會せられるであらう。われわれはディルタイが歴史解釋について論結した如く『哲學と史的科學との間の重要なる關聯態の解釋學が精神科學の基礎の主要部分となる』[15]といふ句をこのやうな事体に關聯せしめて肯定的に承認することが出來ようかと思ふ。もとより哲學と史學とは性格やその存立の分野を異にしてゐる。哲學はいふまでもなく特殊ではなくして一般を、さうして全体を對象とする全体の學である。したがつて哲學は完了的たることを庶幾する。斯様に哲學が完了的であり全体的であらうとする點からして哲學が体系的であることは必定である。これに對して歴史はそれが歴史たる限り自から完了的たることを拒否する。しかしこの兩者は最終的にまで和解を拒むものではないのではあるまいか。この重大なる課題に纏はる幾多の規定を考究するまでもなく極めて端的に言つて、歴史哲學の成り立ちの可能といふそのことが之を肯定し立證するものではあるまいか。總じて哲學は概念の形式を離れては成り立ち能はないが、それは單に外面的な概念の形式を通じてなさるるのではなく、表現を通じてその内面を体驗的に理會することによつて初めて可能となるのである。この意味において歴史も哲學も夫々いかに數多くの規定をもつとしても、その究極の深みにおいてはその夫々の理會の根源は茲に存するのではなからうか。歴史の側から言つても歴史的事象を單にその個別的具体性につける特殊性にのみ着目して究明しようとするのみではなく、歴史的事象を出來ることならば能ふ限り廣い、全体的な立場から考究してみようといふ努力は偏に拒まるべき理由はな

いのではあるまいか。いひ換れば歴史の立場においても個々の歴史的事象の背後に横はる理念的な全体的なものにしたがつて内面的考究を企圖しようとする意圖もまた顧みらるべきものであると思ふのである。

(15) W. Dilthey, Die Entstehung der Hermeneutik (Ges. Schr. Bd. V. S. 331)

われわれは先きに認識は存在から規定せられるものであり、認識もこの意味において存在の一つの仕方であると述べたことであつた。この見地からして政治史と文化史との聯關を觀てゆくとすれば、それは存在としての政治形態と文化形態との關係といふものに結び付きをもつものと言はねばならない。茲では文化を生産し之を維持してゆく社會的集團的存在と政治的行動の主体としての典型的なるものとして國家やその支配者との關係がまた聯關をもつものとして考究を俟つものであらう。嘗て認識論中心の哲學は認識の内容として與へられる内容を認識そのものの法則にしたがつて觀念的に構成するものであると考へたところから、それはその内容そのものの存在性格から離れて認識の形式の特色にしたがつて認識問題を取扱ふとするものであつた。ここでは諸々の課題は認識の形式的方法、主としてその方法論上の特色にしたがつて考究せられるといふ風であつた。しかし近時この様な哲學の在方に反して存在そのものの内容やその特色にしたがつて認識の方法やその特色を規定してゆかうと言ふ存在論的志向が著しく有力となつてきた。この立場においては存在は歴史的社會的存在として捉へらるべきものであると考へられ、したがつて認識もまた歴史的社會的存在性格を備へたるものと考へられる。斯様な意味に

おいて歴史認識の問題は歴史的存在そのものの問題と不可分離的なるものとなつたのである、茲において政治史と文化史との聯關の問題は夫々その內容としての政治と文化、更に進んで政治的行動主体としての國家や國民や民族などと一般に社會的集團性の下にその成立を期せられるところの文化一般との關係にしたがつて究明せらるべきものとなるのである。

ところで歴史の考察において政治史的要素を重視しようとすることは近年の止目に値する傾向である。[16] 政治史と文化史との對立關係が盛んに論じられたのは第十九世紀のドイツ歴史學派を中心としてであつた。もともと歴史は政治史として發達してきたものであり政治史の歴史に及ぼす影響は極めて著大であり、また政治的國民生活こそは歴史の中心をなすものであるといふ考へは寧ろ歴史研究の傳統をさへなすものであつたと言ひ得る。斯様な歴史觀に對抗して第十八・十九世紀の啓蒙時代に文化史が擡頭し登場してきたのである。即ち歴史の歴史たるべきは政治史ではなく政治偏重を排してひろく人間生活全般を歴史記述の對象とすべきであり、かくして人類の全体の發展を知り得るものとなし能ふべきであるとして茲に文化史の立場が樹立せられた。その主張者がヴォルテール (Voltaire 1694—1778) やヘルダー (Herder, J. G. 1744—1803) などであつて爾來文化史は政治史を凌いで優勢とさへなつた。[17] かくて第十九世紀に入るや特にドイツには卓越せる史學者が輩出した。一方にはニーブール (Niebuhr, B. G. 1776—1831)、ランケ (Ranke, L.v. 1795—1886)、ドロイゼン (Droysen, J. G. 1808—1884)、ジイベル (Sybel, H. v. 1817—1895)、トライチュケ (Treitschke, H. v. 1834—1896)、ラムプレヒト

(Lamprecht, K. 1856—1915) 等々の巨星が並び出で、同時にまたこの時代には哲學史家としてフイシャー (Fischer, K. 1824—1907)、ツヘラー (Zeller, E. 1814—1908)、ウインデルバンド (Windelband, W. 1848—1915)、ディルタイ (Dilthey, W. 1833—1911) 等もひとしく出現したのであつてドイツ學界は絢爛たる壯觀を呈し、この世紀を人は呼んで歴史の世紀と稱したのもまことにふさはしいことであつた。さうして政治史と文化史との聯關についてこれらの人々を中心として盛んに論議せられ、つひ最近まではこの問題は文化史の優勢といふ形においてもはや史學者の興味を惹かなくなつてゐたとすら言ひ得る狀態であつた。然るに近時この傾向への反動ともして、また歴史的・社會的なる諸々の要因に導かれて政治史強調の風潮が再び壓倒的となつてきたのは人々の周知のことであらう。(18)

(16) 大類伸教授　現代史學　六八頁

(17) 坂口昂教授　獨逸史學史（昭和七年）三〇—三一頁參照

(18) 大類伸教授　前揭書　六八—六九頁

しかしながら、われわれが茲に政治史と文化史との聯關を問題として取り上げようとするのは單に斯様な現時的風潮の故にのみ基くものではない。惟ふに歴史は單に生成してゆくのみではなく生成を通し行爲し、行爲を通して生成するものである。行爲なくして單に生成・發展するものをもつてはまだ歴史とはなし難い、歴史の歴史たるは行爲が生成であるといふ二重の性格を有するところに存する。したがつて歴史を以て文化史的に生成・發

展とのみ觀ることは歷史の一面でしかあり得ない。歷史は單に他岸にあるものではなく、われわれが行爲的に建設するものであらねばならない。これは政治史的なる層面である。斯く歷史は偏に政治史のみでもなく、また單に文化史のみでもなく、文化そのものも政治を媒介としなければ眞によく成りたち能はないものであると思ふ。歷史はかく單に發展ではなくまた建設であるが、しかし同時に生成する力がないならば人は行爲することが出來ない。かやうに政治と文化とを聯關せしめて考ふるとき發展は同時に行爲であるであらう。(19) われわれが政治史と文化史との聯關を考究しようとする意はまたこの樣なところにも係はつてゐるのである。

(19) 田邊元敎授　歷史的現實　八五—八八頁參照

三

そこで政治史と文化史との關係をみてゆくに當り政治史とは如何なるものを言ふかといへば、既述の如く由來歷史として考へられてきたものは政治史であつたと言つても差支なく、歷史は元來政治史として發展してきたものであつた。ところで政治史において價値ありとせらるるものは政治的行動において顯著なるものである。そこでは國家活動の能動的方面は言ふまでもなく、ひろく政治的行動に關係ある種々のものが有力なる對象とせらることになるのは當然のことである。政治的行動と稱するもののうちその主要なるもの、顯著なるものは何を措いても支配者乃至爲政者を巡る諸々の事象である。かくして支配者乃至爲政者の政治的行動が歷史記述の中心的

なる關心事とせられ易かつたわけであつて、茲に政治史が本來個人中心的なる性格を帶びるの原由が存する。この點はラムプレヒトがまさしく剔抉せる如く『政治史は究極するところ個人史である』と謂はるる所以であらう。しかしながらかく謂ふところの政治史は在來主として國家において現はるる政治的行動を中心的なるものとする歷史であると言つても、正しく考ふれば政治や政治的行動は單に國家において、また國家によつてのみ現はるるものではない。いまこの樣な政治の妥當領域に關する根本的討議はしばらく措いて一般的なる通念にしたがつて考へてみても、謂ふところの政治史は單に國家の支配者乃至爲政者の政治生活にのみ限局せらるべきものではなく、それと關聯ある國民の政治的なる諸々の情態をもひろく包含して成りたつものであり、またあらねばならない。近時歷史の分野に新らしく再興しきたれる政治史の意味やその志向の性格は、斯樣に謂はば全般的なるものなのである。これは近時の顯著なる事實であつて以前に政治史と謂はれてゐたものは一般に政治支配者、爲政者の行動に纏はる謂はば狹義のものであり、したがつて政治史の性格は所詮個人史的なるものとして規定せられる類のものであつた。これに對して所謂廣い一般的意義をもつものとして文化史が謂はば綜合的歷史として對立して存立してきたのである。したがつて文化史とは歷史的事象の單なる外面的記述に止まらず、更に深くその內面的なるものの記述にまで進まうとするものである。故にそれは單に歷史の表面に現はれる具體的な個々の歷史的事實の外部的性情のみではなく、それらの背後に潛んで廣き角度から個々の歷史的事實を支配し、それを通じて表現せられるものの眞に在るべき姿を把握して明らかにしようとするものであるとせられてゐる。

そもそも文化とは人が一定の目的乃至價値にしたがつてその理想を實現せんとする努力において生産せられるもので、それは單なる個人意識の上に成り立つものではなく、人々の協働の上に形成せられて成り立つものである。かく文化とは一般に個人としての人間の努力やいとなみの上にではなく、人々の社會的共同活動の上において價値ありとせらるるものの客觀的に表現せられるものを表象する。人間の協同が畢竟社會である如く文化そのものは社會共同性の上に生起する。この故に文化史とはこの様な文化を内容とし、この様な價値とその表現に聯關する諸々の事象についての歷史を記述の對象とするものであると解されるのである。そこで文化史にあつては人間生活の社會的諸方向に亘つてその事象とその意識とを捉へその形態を記述すると共に、そのものの發生並に發展の過程を究明し、更にその時代とその背後にある理念的なるものとの關係を加へて全体的聯關を考察するものであると言へよう。したがつて文化史は一方においては背後的なる理念に關係し、他方においてはその生産者その擔持者としての社會民衆や民族等を前提とする。したがつてそれはより多く社會思想や社會生活における輿論や習俗や傳說や言語等々と深く聯關する。この意味からして文化史はまたより多く社會史的性格を有つものであると言つてよいと思ふ。この故に文化史はその本質から觀て思想史をもつて最もその純粹なるものとすると言ひ得るであらう。さうしてひろくその文化の生産せられる時代、ひいてはそれを擔持する社會民衆を考へるときそれは社會史とも深く聯關するものであるといふことになるであらう。このことを具体的なるものにおいて見るとき、文化史が客觀的に表現せられたものの歷史として、譬へば法制史、經濟史、宗教史、習俗史、科學史、言

語史、藝術史、等々のものにおいて成り立つことが示されるであらう。これを觀念的なる意識形態として觀るとき、それは思想史一般となり、更にそれは個々の學問史における意識領域における夫々の思想史として示されるとき、それは次の如きものとなるであらう。譬へば法律思想史、經濟思想史、國家思想史等々といふが如くである。更にこの様な諸々の文化形態が精神文化として捉へられることは屢々であり、その場合には文化史はまた精神史的性格を帶びるものとなるわけである。現時文化史はこの様な意味でますます精神史的傾向を增し加へてゆきつつあるものと觀取せられるが、われわれはこの點は更に後述するであらう。

そこで上示の如く政治史は究極のところ個人史的であり、他方文化史は社會史的であるとすれば兩者の區別は極めて明瞭であるようである。しかし政治史の對象となるべきものは偏に個人的なるものではなく團体的なるものでさへあり得る。さうしてこの傾向はますます强くなりつつある。即ち國家や民族などに關して最も價値ある史的個性を求めてゆくとき、それは必ずしも全く個人的なるものではなく、むしろ團体的なるものにおける有機的なる統一体に至らなければならないからである。しかもこの場合それは多分に精神史的傾向を帶びて來る。かく所謂舊き政治史は個人的なる個性に重點を求めるものであつたが、新らしき政治史は統一的な個性存在に向はうとしてゐる。かく觀てくれば政治史もまた精神史的傾向をもつものになりゆかうとして居り、したがつてそのものの文化史への接近が觀取せられる。(1)

（1）大類伸教授　前掲書　八三―八四頁參照

他方文化史においてもその擔持者が社會民衆乃至社會衆團であるとしても、それらのものが現實的に歴史を生産するためにはなほ政治的なる現實的なる力を必要とするものと考へられる。蓋し文化の形成に對する最も力強い働らきかけは國家からのものに基因するであらうし、したがつて文化史が假に如何に政治的なるものを輕視し或は拒まふとしても、政治的なるもの乃至國家的なるものが文化生活の諸層面に對しその中樞的なる場を占めるであらうことは否まれないものの如くであるからして、かうした文化を對象とする文化史が政治的なるものの影響から全く自由であり能ふわけがない。實に民族が文化の生産者であり且つまたその擔持者であるとされるとき、かく民族が民族史の主体者たり能ふがためには民族はそれ自体何等かの意味において政治的主体性を有たなければならないのではあるまいか。文化史において由來政治的なるものを輕視し排斥せんとするところに文化史そのものの力量性が稀薄であつた所以があり、歴史がおしなべて政治史的なるものの一筋であらうとした根源があつたと觀ることが出來る。したがつて文化が社會衆團に於て力強く形成せられゆくためには政治的なるものが含められてあらねば非力なのであり、この意味からしても文化史がその基調において何等か政治的性格を帶びてゐなければならない要請があるとさへ考へられる。

われわれはいま文化史の成り立つためにはなほ政治的なるものがその基底にあらねばならないであらうといふことを述べた。もともと政治はたとへば法制や經濟や、はたまた思想や宗教などと均しくそれ自体文化形態の一

つである。政治學をめぐつて文化科學としての構成成立の可能が論證せられる所以も要するに茲にその淵源を有する。かく觀てくれば政治史と文化史との區別の契機は個人史的と社會史的といふが如きものにおいて簡單に律し得られるものではないと言はねばならない。實際政治史と文化史とは相互に結合してゐるものであつて、政治史を排除したる文化史も、文化史を排除したる政治史もともに成り立ち能はないと言はねばならない。しかしながら、斯様な見方もなほまた觀念的であつて、實際はこの兩者はいづれをもつて中核とするかといふことにおいて、そこに對立的な關係が現はれてくるのである。既に明らかであるが如き意味において政治史も文化史もともにその領域は人間生活全般に亘り得るものであるが、しかし政治史の場合にはその中心を政治に結び付けて成りたち、他方文化史にあつては生活全般に關與しつつもなほ精神文化にその支柱を置きつつ成立するものであるといふ點は拒み難い。そこで、先述の如く政治が文化形態の一つであるといふ見解をとり、合せて政治史と文化史とは相互に結合してゐるものであつて、夫々その一者をいづれのものからも缺き難いといふ點に立脚して考へるとすれば、歴史を廣義的なる文化史的立場において綜合的に考へるといふ立場に立つことになるとでも言はなければならないであらう。いまこの様な謂はば高次的な且つ廣義的なる文化史的立場に立つとしても、なほこの場合の文化の原動力をいづれの側に求めるかといふことによつては依然政治史と文化史とは對立的に觀想せられ、兩者の對立關係はなほ存立すると言はなければならないのではあるまいか。

しかし政治史と文化史とは依然かく對立的關係を根絶しないとしても、そもそも文化の概念のうちには政治も

含まるべきである。したがつて眞の廣い意味における文化史は政治その他のあらゆる人間生活の種々相を攝するものであらう。しかし文化史は假令普遍史的であるとしても、文化史の特殊的なるものにあつてはなほ特殊的人格者の特殊的行爲を媒介として初めて可能となるとか、或はより確實にせらるるとか言ふが如きものや、またその様な場合があり得る。譬へば藝術史においてミケランジェロ、宗教史においてルツターといふ如き人々に纏はれるが如き歴史的事象の如きものは、特に秀いでたる特殊的個人的行動を明瞭ならしめゆくことによりてその夫々の文化史のより裕かなる建設が可能であるような事体であり、かかる事例はまた尠しとはしないであらう。茲に文化史における特殊的な史的個性の媒介といふことの所在の一つの典例が求められるであらう。他方また政治史にとつてもそれが假令個人史的であるとしても、譬へば政治的巨人の精神構造を分析するとか或はヘーゲルにおけるが如く客觀的なる國家組織そのものの精神を明らかにするといふことなども可能であり得る。然りとすれば對象の性質に基いて政治史と文化史との區別を立てるといふことは必ずしもつねに明瞭ではあり得ないこととなりさうである。かく言ふとき論者或は次の如く反問するかも分らない。即ち、この様な見方は政治史と文化史との對立に纏はる當初の意味を抹殺して政治を以て單に文化形態の一つとして取扱ふとするものであつて、この場合はもはや謂ふところの政治乃至國家は精神化せられたるものとして受取られて居り、したがつてそれは既にそのことの現實的なる意義を沒却せしめられてをるのではあるまいかと。この類の質疑は正さしく至當であるであらう。しかしながら現時において政治史と文化史との對立の意義やその問題は、それが第十九世紀において有

したが如き意味においてはもはや問題ではあり得ないことは自明である。今日なほ文化史の有する廣き立場やその深き意味を認めずして、歴史は單に政治史あるのみと考ふるが如き者はないであらう。いかに政治史の有する重要なる意義をいかに高く認めるにしても、文化史の占めて有する深き意義を否むが如き者はなかるべきである。同樣によしんば嘗ては科學の立場からして文化は政治や國家の關與を拒むべきものであるといふことが主張せられたことがあつたとしても、また現實に文化への關與を差控へるといふ態度が國家によつて採られたことがあつたとしても、今日においてもはや斯樣な事体をつねに正當視しようとするが如きことは問題とはならない。今日では政治と文化とは斯樣にも截然たる區別のもとに對立關係を持するとのみ偏に觀ることは許されない。この意味において新しき意味における政治史並に文化史の性格が問題とせられなければならないであらう。

顧みるに第十九世紀後半とりわけラムプレヒトを中心に政治史對文化史の問題が劇しく論議せられたときには、政治史に對立するものとしての文化史は精神文化各部門に關する歴史をもつてその主体的なるものと考へられた。この樣に文化史をもつて精神文化各部門史として理會するとすれば、さうしてそれらは各々主として精神文化を對象とする歴史であるとすれば、政治史と文化史との對立關係は一應肯定的に承認せられるわけである。ただしこの場合あらゆる人間生活の歴史は政治的方面に聯關せしめられることによつてより多くの歴史的價値を帶びるものであるといふ點において史學者の見解は多く一致するものであつた。玆では結論的に政治史を以て諸部門史の中樞的位置におくといふことに歸してゐる。[2] この點においてはラハファール (Fr. Rachfall) の見解は

徹底的である。彼は國家と社會文化生活との相互影響關係を强調しながらも歴史における凡ての志向は政治史へ向かつて集中すると力説した。したがつて彼はそもそも政治史と文化史との對立關係を認めないものであるとも言ふべく、この意味からして彼が文化史は政治史に綜合せられて始めて最高の統一体を具現すると說いたのはまことに彼としては當然なる論結であつた。(3)

(2) 大類伸敎授　前揭書　九〇頁

(3) Fr. Rachfall, Staat, Gesellschaft, Kultur und Geschichte, 1924. (cit. Keyser, Geschichtwissenschaft S. 170 大類敎授　前揭書　九〇頁)

この様な志向は更にリンドナー (Th. Liudner) においてもひとしく覗はれる。彼は歴史的發展的にして、しかも決定的な形相と目的とを有するものは國家形態において最も顯著であるといふ立場からして歴史における國家の立場を强調した。國家は經濟よりも多方面であつて、しかも一層固定的である。この故にいかなる史的考察も國家を除いては不可能であると彼は主張したことであつた。(4) これらに對しマイヤー (E. Meyer) は政治史、文化史の區別を對象の內容からしては承認したのであるが、究極のところこの兩者の對立の意味は相對的なるものにすぎないのであつて、兩者が相合して始めて人間生活をその完全性において捉へることが可能であると說くところがあつた。しかしながら彼は他面においては文化史に對して政治史の優越を主張した。即ち曰ふ——『蓋し國家的結束は模範的なる外的組織にして、其の成員の生活は全く國家に依存してゐる。さうして文化や經濟生活

の上にも決定的意義を揮つてゐる。固より後者も國家生活に影響することは大であるが、それ等が史的意義を有するのは全く國家的方面からの作用に依るのである。史的發展の內的價値や性質は文化の上に存するとしても、それの外的發現は常に國家に關聯しないものは無い。史上の時代區分が政治史のみならず、文化史その他の諸歷史をも政治的方面に關聯せしめてゐるのは實に以上の結果である』(5)と。なほまた『要するに人間の働作は終極政治方面に關聯して來る。政治史はあらゆる歷史の中心に立つ』とも言つて居る。(6)

(4) Th. Lindner, Geschichtsphilosophie, 1912 SS. 127—30　大類敎授　前揭書　九二頁

(5) E. Meyer, (Geschichte des Altertums, I. 1) SS. 197—198.

(6) Theorie und Methodik der Geschichte, S. 46.

註(5)及び(6)兩者共　大類敎授　前揭書　九一—九二頁より引用

茲において惟ふにラハフアールは究極的には政治史に對立するものといふ意味においても、更にまたいささか極言すれば、政治史とは異種なるものといふ意味においても歷史としての文化史の所在を認めないものとも言ひ得ふであらう。斯かる立場からしては、われわれが究明しつつある課題は恰も當初から問題として採り上げられてゐないにも等しい。リンドナーにあつては見方によつては前者と稍々同樣とも言ふべき觀想の下にこの課題が取扱はれてゐるが、マイヤーにおいては政治史と文化史とが一應區別せられ、その上で綜合的立場に立つものとしての文化史の成立が認容せられてゐるものの如くであるが、後者の點に至つては未だいささか不明瞭であつ

て、結局は政治史の優位が論結せられてゐるわけである。前二者の立場は事体に關する史學的究明における謂はば舊き時代の史觀に立つものであり、そのことの限りにおいては或は夫れなりに課題の究明に資し能ふところのものがあるかも分らないが、今日においては敢へて極言することが許されるならば、それはせいぜい過去のモニュメント的な意義を漂はすに過ぎないと言ふべきであらう。マイヤーにおいては前二者に比して謂はば一段と廣く高き立場を持すとも解すべきであるが、それは要するに依然當面の課題につける第十九世紀的傳統を正統派的に繼承保持せるものと言ふべきであらうか。この意味からはマイヤーの立場もこの課題に即する史學的思惟の上ではなほ過去的型態に所屬するものであると解し得るであらう。今日におけるわれわれの課題は斯かる意味における學問的遺産に對する內在的批判のうちからして築きあげられなければならない。

四

既に述べしが如く政治史對文化史の對立關係に纏つはれる理論の究明は第十九世紀ドイツ歷史學派を中心とせる課題であつて、幾多のドイツ史學界の巨星が恰も系譜をなせるが如く連つてこの課題につき論議を交へたことであつたが、今日この輝かしき傳統を擔ひつつも自らまた近代歷史思想の新しき展開のための一時期を象徵するが如き展望を示すものはマイネツケ（Friedrich Meinecke）である。マイネツケは單にドイツ現代歷史學界の第一人者であるばかりでなく、またこの意味において劃時代的なる史學者である。したがつて彼が今日のわれわれ

に對して有する意義は決して少しとはしない。[1]彼の史學者としての課題は之を要約すれば、一方においてドイツ歴史主義の傳統を文化史の方面よりするところの攻撃に對して防衛すると共に、同時に他方においては政治史の有するところの政論的傾向性とその視野の狹さとを克服しようとするところにあつた。彼はドロイゼン（Droysen）、ジイベル（Sybel）、更にトライチュケ（Treitschke）と繼承せられてきたところのドイツ歴史學派の政治史優位の傾向に對し、特にトライチュケからデルブリュック[2]（Hans Delbrück 1848—1929）への推移發展において展示せられし如き政治史よりむしろ戰術史（Kriegskunst）への退化の趨勢に對して、單純に政治史の傳統を墨守しようとするものではなかつた。これらのドイツ歴史學派の人々が餘りにも政治史的なる志向の故に却つてその史的視野の狹小偏倚に陷入らうとするの形勢に對して、彼は斯かる意味においての政治史固有であると一般に考へられてゐるところの視野の狹矮を克服して政治史をして精神史へまで高めることに力を致したのである。彼はこのことをトライチュケ批判において論述したことであつた。[3]即ちマイネッケはトライチュケの規定する『歴史的』（Historisch）といふ概念の視野の狹小と內包の淺さの故に後者の政治史敍述に限界性を認め、さうして政治史をしてより高次的なるものとしての精神史へまで高め、かくして之をばドイツ理想主義の傳統に從ひながら建設しようと努力するものであると考へられる。[4]

（1）中山治一氏　政治史の課題　九七頁以下參照

（2）Delbrück——主著 Geschichte der Kriegskunst im Rahmen der Politischen Geschichte, 3 Bde. 1901—1907.

ベルリン大學教授、一八八三―八九年までトライチュケと共同して、その後獨力にて一九一九年まで Preussische Jahrbücher を編輯す。

(3) Fr. Meinecke, Geleitwort zum 150. Band der Historischen Zeitschrift und zum 100. Geburtstage H. v. Treitschke, His. Zeits. Bd. 150.

(4) 中山治一氏　前掲書　一〇四―一〇八頁參照

かく言つてもマイネツケにあつてはなほ政治史と文化史との關係はいささか明を缺くものがある。彼がトライチュケ批判を試みつつ歷史における價値と因果關係について關說したとき、文化史は主として價値に關係するものとなし、これに對して政治史は因果關係に據るものであると論じた。(5) 即ち政治史にあつては因果に基づくところの關係が生命であると解せられるのであるが、因果的なること自体は必ずしも强き作用を意味しては居らず、むしろ影響作用は因果關係を超越し得るものとせられ、價値の問題は超因果的の範圍に屬し、文化史の概念はその價値に立脚するものとして解せられてゐる。かく彼は文化をもつて獨自的なる價値、いひ換れば史的個性の所產とみて居り、この文化を對象とするものが文化史であつて、この故に文化史こそは眞の歷史であると說く。茲では國家をもつて最高の文化價値の具現とみるところの文化國家觀は否まれてゐる。しかしもし因果關係的立場から觀れば國家をもつて歷史生活の中核とする政治史優位の立場が認められるのが當然であるとせられるであらう。すべて文化價値を發見せんがためには廣汎なる因果的基礎を求めることが必要であるから、國家が史的生活の中樞を占取しやうとすることは明らかであるが、しかしこれとても國家は最高の文化價値を擔ふものではな

い。何んとなれば國家は爾餘の史的個性よりもより多く自然的生物學的必然性に結ばれてゐるからして、自ら精神化し道德化しようとしても之を完ふし能はないからであるといふ風に說かれる。(6) 斯樣に政治史優位の見地は一應拒まれてゐるが、それかと言つて政治や國家に認められる實踐的な創造的な行動が彼の所謂精神的な優位に比して偏に劣性であるとは一概になし難いといふ風にも彼は承認してゐる。かく彼は現實的生活と文化價値との相互間における交互的な相關々係とその意義とを認めてゐるわけである。この樣な意味においては舊き型態におけるドイツ歷史學派の政治史優位の傳統的思惟は、彼においてはその儘には墨守せられてはゐないことを知ることが出來る。しかし未だなほその兩者關係の正しくあるべき基礎付け並にその意味付けは不充分である。せいぜい彼の意圖は價値における文化史の優位を認め、政治史をして均しく文化史にまで昻めようとすることに存する。もともと政治史家でありながら彼が政治史の精神化・文化史化を努めたことは止目すべき點であるが、しかし彼が依然として政治史と文化史との對立關係を未だなほその對象關係において捉へようとしてゐるところに彼がドイツ歷史學派の傳統的立場を克服し得てゐないことを示すものが存すると考へられる。(7)

(5) F. Meinecke, Kausalitäten u. Werte in der Geschichte (Hist. rische Zeitung, Bd. 137, ss. 23—24.)

(6) Fr. Meinecke, op. cit. SS. 23—24.

(7) Fr. Meinecke, op. cit. SS. 25—26.

われわれがマイネッケの歷史主義の志向やその意圖について顧みたるところは、大いなり小なりに彼を含めて

爾後の斯學の一般的動向についても同趣であるとなし得るであらう。第一次世界大戰後に現はれたところの政治學や國家學の分野における顯著なる現象として觀取せられし一つとしては、國家論をめぐる變貌のうち、特に事前第十九世紀以降支配的立場を占めて來たところの社會構造說が國家論における指導的權威的立場にゆるぎを呈して來たと認められることである。もともと政治學において國家概念の占むる位置は政治學にとつて基本的に重要なるものとせられてゐるが、それは由來國家の概念が政治の概念の定立解明にとつて不可缺のものとして取扱はれてきてゐるからである。いまこの問題に對する吟味はわれわれの深く意とするところではなく、且つわれわれはこの様な一般的なる見解とは別箇の見解を採つてゐるものであるが(8)、國家の概念が如何なる要素をもつて内容付けられるにもせよ、國家が一種の社會形態乃至社會組織を内有してゐるものであるといふ點においては、大方の異議のないところである。かくして政治學において政治概念の定立を何等かの——さうしてそれは多くの場合殆んどつねに國家における——社會形態乃至社會組織に纏はつて構成しようといふのが謂ふところの社會構造說と呼稱せられるものである(9)。かかる社會構造說において樹立せられし國家觀や政治概念が社會自体の變貌にともなつて變移し、そこに機能主義的理說がこれらの變移に適應するものの一つとして生起して來たことであつた。この點もまたもとより本稿の課題とするところではない。ただこの様な情勢の向かふところと流れを同じくして政治的なるもの乃至國家的なるものと社會的なるものとの對立が顯著に認識せられるに至つた。斯かる志向は政治學や國家學の分野にのみ限定せられず、諸々の領域においても均しく顯はに觀取せられたことであり、た

とへば社會學が急速なる發展を展開したのも謂はばこの傾向の現はれの一つであつた。この趨勢は諸々の分野にひろく亙つて、やがて政治的乃至國家的なるものからの社會的なるものの分離を促がし、やがてまた社會的なるものの政治的乃至國家的なるものへの對等併立をきたし、やがてつひに社會的なるものの政治的乃至國家的なるものへの優位といふが如き轉位へと發展したのであつた。

(8) 拙稿『政治概念の究明』(臺北帝國大學文政學部政學科研究年報第五輯公法・政治篇)參照。尤もこの拙稿の內容については其後若干の思索と讀書とにより、或は又他からの敎示によりいささか改めたい個々の點もあるが、その大要においては今も別に根本的に異れる見解には立つてゐない。

(9) Benedetto Croce, Grundlagen der Politik, 1924, S. 7.

かくして歷史の分野にあつては政治史に對する文化史の優位の形勢が醸成せられ初めることになり、やがてまたそれが政治史の精神史化を導きいだしたのも要するにこの志向の發展を物語るものであつたかと思ふ。しかも文化史そのものも當初の形態であつたところの文化各部門史の形式からは脫して漸次に一般的・綜合的なるものへ向かひ、各部門史の上に人間の文化生活全般に亙る文化史を建設するといふ形勢へと進展した。(10) このことは文化の各々個別的なる特殊的なるものをつねに全般的聯關において考察しようとする志向の現はれであり、さうしてこの樣にして人類文化の全般を敍述の對象とするものが文化史であるとなされた。そこでは外部的に表はれたる個々の事象にのみ捉へられず、つねにその背後的なるものを認識し敍述しようとする努力が高き價値をもつも

のとして說かれた。政治史にあつても舊來の夫れの如く單に歷史の表面に現はれし政治史的事象に對する關心に止まることなく、ひろく人類の文化理念に對する關心を示すものであらねばならないとせられた。實を言へば政治もまた人間の文化的所產の一つであるわけであるから、政治史もまたかくつねにその背後的なるものに結びつけらるべく努めらるべきであり、またかくすることに依つてこそ始めて歷史の最高の統一体が求められるであらうと主張せられたものであると解するのである。(11) この様な志向は政治史と文化史とをしてやがて精神史へ向かつて止揚しようとする傾向を指示してゐるものであらうし、これが史學において謂はば建設的なる志向として新たに認められてきたことであつた。かかる精神史の立場を採るものは歷史を單に平板面な靜的なるものに止めないで、進んで之をレアルな、さうして能動的なる人間生活の全般に聯關せしめて成り立たしめようと企圖する。斯かる新らしき裝ひのもとにおける精神史ももともと文化史の範疇に屬するものであり、いひ換ればそれはその本來の淵叢を文化史の圈內に有つものであるからには、如何にこのものの內實として强力なる動的なるものをもつてし、且つ如何にその領域を擴大するにしたところで、なほ生活の非政治的な非現實的なる方面に重點がおかれることは、恐らくは免かれ難い點であらうと言はねばならない。もとより文化史の內容に關する史學者の見解、ひいては文化史の本質論に至つては史學者の諸說が歸一してゐるわけでもなく、加ふるにまた今日史學者の政治史と文化史とをめぐる觀念や思想は一般的にみても、はやそれが嘗て問題とせられたやうな意味においては問題とせられなくなつてゐることは明らかである。しかし上來觀てきた如く一般的にみて政治史の文化史化と

いふ現象が大いなり小なりに史學の源流の向かふ方向であるかの様に考へられる。さうして上示の如く文化史はもともとその發足點からしても、またその内容の點からしても政治的・現實的なる面には係はりをもたざる立前であつたところからして、文化史の立場には現實的生活の意欲が薄弱であるばかりか、政治に觀らるる様な積極的なる行動性が乏しい。したがつて現代の如き社會的危機がまた同時的に文化の危機でもあると考へられるような時代においては、本來的な意味における文化史の迫力は一段と稀薄であると感得せしめられる。茲においてか文化史の立場からしてこの様な時代的負荷に堪え能ふべきものとして、そのものの精神史化への飛躍的なるパトス的なる發展が媒介せられて成り立つたものではあるまいかと考へられる。茲に謂ふ精神史は單にひとり文化史からのみの發展によるものではなく、より多く文化史の地盤に即して文化史と政治史とを精神史へ向かつて止揚して捉へたるが如きものの謂におけるものを持ちいだしてゐるわけであるが、ともあれ事体はこの様に觀取せられる。しかし歴史の生成や歴史學の理論並にその發展について自づから門外者たるわたくしは、數々の點においても同様であるが、この邊の知識において事のほか晦らく、したがつて憶斷の嫌ひあるを免れ得ないであらうことは自づからよく知つてゐるつもりである。しかし現在のわたくしには事体をこの様にしか解釋せられないのであつて、この點は特に專門家の叱正と示教とを仰がなければならないところである。

(10) J. Huizinga, Weg der Kulturgeschichte, 1930, SS. 62—63.

(11) E. Keyser, Die Geschichtswissenschaft, Aufbau und Aufgaben, 1931, S. 185.

かくてわたくしの見るところでは、文化史の積極面に對する非力性はそのものの精神史への高次的綜合的發展において補完せられようとするものの如く解せられる。なるほど政治は所謂狹義における文化に比しては積極性に富み、且つより現實的であるが、しかし政治は文化に比してはその視野は狹く且つ偏執に傾きやすい。しかるに『「精神」はあらゆる人間生活の根源たる力であつて、その綜合的機能において他に傑出してゐると共に、「文化」の如く消極的でなく、現實遊離的でない。蓋し生活現實面と提携し推行してゆく意欲と能力とをもつ源泉的な力として、「精神」が取り上げられたのは當然と思はれる。蓋し人間の「生」と最も深く且つ廣い聯關をもつ歴史觀として、政治史より更に高い精神史が登場したのである』[12]とは大類博士の說かるるところである。しかし博士は精神史の現代的意義を說かれし際に、精神史もまた歴史である限り客觀性に立脚すべきものであるが、しかしなほ相當の主觀性をもつものであり、しかもその主觀性は文化史に比較すればすぐれて行動的であるが故に茲にそのものが人間生活の政治面と接觸するところが存してゐる。しかしそれが餘りに政治史的聯關に偏狹するときは歴史の具体性を毀つことになると警告せられた。さうして精神史の立場にあつては特に一つの力の支配的意義を認めない傾きがあるといふことを基礎的とし、そのことをもつて恰も精神史と政治史との區別、したがつて根源的には文化史と政治史との區別の契機である、といふ風に定立しようとせらるるものの如く解せられる。[13]茲においてわれわれは廣義に解して、文化史と政治史とをめぐる昔ながらの對立關係が打絶ち難いものであるといふことを知ると共に、かく兩者の對立關係を認めなければならないとするならば兩者の區別の契機をいづくに

求むべきであるかについて學び得るところがある。

(12) 大類伸敎授　前揭書　一二七頁（昭和十八年再版）

(13) 大類伸敎授　前揭書　一二七頁―一三五頁參照

しかしながら、われわれをして率直に語ることを許されるならば、この様な史觀の下においては精神史――よしんばそれが政治史に比して高次的なるものであるにもせよ――にあつては之を強いて言へば、なほ政治の現實的なる力から無關係のものを問題としようとしてゐるものであるかの様に考へさせられる。尤も博士は精神史の高揚を近時の顯著なる事象として說かれつつも、なほ最近の時代の動勢、時代の劇しき變動の影響として歷史觀にも動的傾向の顯著なる動きの存することについて注目を喚起しては居られる。(14) しかしながら現時史學者の諸說によつて現はれるところを推しはかれば、先にも想定した様に、史學の分野における現時の態様として政治史と文化史との精神史に對する關係の意義は、精神史が文化史よりも人間の『生』により深く、またより廣く聯關を有つ歷史觀であるとして、それ故に政治史よりもより高いものとして精神史が採り上げられようとすることが一般的傾向であるものの様に理會せられる。さうしてその精神史とはその謂はるるが如き性格からして政治史よりはより裕かに、より深く文化史の地盤を基調とせるものにおいて捉へられて成るものと解せられる。之を簡略に且つ端的に言へば、それはむしろ文化史を基盤として政治史の精神史へ向かつての綜合とでも言ふべき形式において構成せらるるような歷史觀であると解釋することが許されないであらうか。斯かるものとしての精神史は政

治や文化よりは精神をその基底として成りたつものであり、さうして「精神」は「文化」よりは情熱的であり積極的であるが、しかし政治の如くしかし偏執に陷入ることなく、よく人間生活の諸々の方面に亘り能ふ創造的能力に富んでゐる。かくして一面においては政治史の精神史化が企圖せられる可能性があり能ふと共に、他面においては政治も畢竟文化の一所産であるとなす立場からして政治の偏小狹矮を退けて、それよりはより廣きより裕かなるより根源的なるものを捉へんとして文化史的なる追求の行程が取られようし、またとられ得るわけでもあるであらう。かくして成り立つものが政治史と文化史との止揚によつて新らしきものを生み出だそうとする行程とその軌をひとしくするものであつて、それが精神史の形成であると考へ得られるのではあるまいか。

(14) 大類伸教授　前掲書　六八頁以下、同一六八―一六九頁その他

そこでもしも先から考へきたつたが如く精神史が假に政治に關して能ふ限り無縁であらうとすることをもつてその第一義的本領とするものであり、或は更に精神史はそれが精神史たる限り、斯くあらねばならないものとせられるものであるとするならば、そのことは結局は政治史をして再び表面に浮かびあがらしめ、政治の現實的行動面における理念的創造的なるものが如何なるものであるかを示すべきであるといふ傾向を再現することになりはすまいかと考へられる。しかも加ふるに現時は人々のよく謂ふが如く、政治的要素の强化せられつつある時代である。人々の生活は個人的立場においても社會的立場にあつても、各方面の自由にして獨自的なる存在が一方

的なる中心的なる現實的なる力に統合せられつつある時代である。そこでこの様な政治的統合の要請せらるる時代がいかにして到來したかについては、その據つて來たるところは深く且つ多岐多端に亘る要因に負ふて居り、これまた人々の周知するところであり且つこの小稿の直接係はる問題ではない。要するにそれは政治的並に經濟的安定はいふに及ばず、精神的並に全社會的安定の確保のために、總じて諸々の文化的事象やまたその諸機構の上に顯はれし衰微や變轉や頽廢等に對して、廣汎なる社會的なる統合（Reintegration）を必要とするに至つた事態が生じたことに基因してゐる。茲においては社會的轉換が社會的危機の形相の下に著しく感ぜられ、このことはまた當然に諸々の文化に對しても均しくその危機として作用し始めたことであつた。さうしてこの現象は思想の分野、イデオロギーの方面において極めて敏感に力強く影響したのであつた。かくして精神科學の復興が新たに力強く要望せられるに至つたわけであるが、ここにとり出だされし文化の危機における精神科學はもはや新カント主義の夫れ、更により具体的にいつてヴント（W. Wundt）の夫れではなく、新らしき時代における社會的事實と客觀的に離れてはあり得ないものとしての新らしき時代を指導し能ふ精神科學の意であらねばならないとせられる。要するに現代の文化の危機における精神科學は、社會の科學が精神の科學であるとせらるるところから由來して成りたつものである。茲では社會が精神であるとさへせられる。加はふるにここでの社會精神はヘーゲルの謂ふところの客觀的精神のそれの如く單なる規範や形式ではなく、生ける實体であらねばならず、しかもそれは生ける發展的生命であらねばならないとせられる。(15)

(15) H. Freyer, Einleitung in die Soziologie, SS. 4—12.

斯様な文化の危機に際會しての精神科學の復興の要請並にその事實が特に著しく國民的並に民族的精神の昂揚に資することの大なることは極めて明瞭である。茲に高次的なる綜合的なるものとしての精神史の擡頭の場がそなへられ、さうしてまた史學者の說くところの政治史の精神史化の根柢が存するのであらうと考へられる。しかしながら現代の文化の危機においては既述の如く、もはや文化を文化の問題として考へようとする立場は止揚せられて居り、文化の社會的・政治的關心が要請せられてきたのである。かくして文化の危機の理論は力強く社會的實踐、とりわけ政治的實踐に結びついて論ぜられるに至つた。このことを程遠からざる以前に、たとへばケルゼンによつて國家論の領域においてすら全く政治や社會理論のない國家論が華々しく提唱せられ(16)可なりの廣範圍に亘つて人々の支持をかち得たことでさへあつた事實と對照して考ふれば、その劇しき變轉に對し一面まことに驚きの念を禁じ能はないものがある。しかしこの様な國家論は社會危機ならずとも國家論としての個有的な立場からしても、そもそも成りたち能はざるものであり、したがつて久しくその足場を保持し能はざるべきものであつたことはむしろ當然でさへあると思ふ。(17)況んや社會危機に際しては一層斯様な實体のない、生命なき政治學乃至形式のみの國家論が政治學や國家論における指導的權威的立場を持し得ざる可きことは必定である。

(16) Kelsen, Allgemeine Staatslehre, 1925, SS. 7—21 特に SS. 16—17.

(17) 拙稿「政治史と國家論との聯關」臺大年報第七輯公法篇 昭和十六年參照

斯様な多端なる經路を辿りつつ今やひろく文化的なるもののうち政治的なるもの、國家的なるものが力強く前景に顯現してきたのである。諸々の文化は政治的なるものに結び付けてのみ自らの所在を確保し能ふとさへ言はれるに到つた。茲ではあらゆるものが政治的決斷（Politische Entscheidung）に係はつてゐる。したがつて政治の全体性の要請がますます力强くなることが現代の主流的傾向であると考へらるることと謂はば複合的に、歴史にあつても政治史の優位の主張或はややともすると政治史のみが歴史であるとなす見解が新らしく現はれないとも限るまいと考へられる。或は現に既に歴史學の分野において斯かる見解がいづこかで新たに提唱されてゐるのか否かも分らないが、歴史學の門外者たるわたくしは之を詳にする據所を持合せない。時代と諸々の世相からはかくあるとしても今や別段に奇矯ではないとも思はれるからである。しかしながらいかに政治的統合が時代の著しい且つ有力なる、或はまさに運命的ともいひ能ふ潮流であるとしても、わたくしの考ふるところでは歴史はただ政治史あるのみとなして文化史の有するひろき深き意義を否定しようとするが如きことは、いかにこの時代とこの時代におけるそのことの意義が嘗てこのことが問題とせられし年代における夫れとは異るものがあるにしても、是認せらるべきではないばかりか、むしろ今や却つて斯かる見解は拒まるべきであるとさへ考へられる。この種の歴史觀は由來文化史の本質的形相やその意義につける理會が低いところにその據つて生起した所以があるわけであるが、更に現時における問題のありかたが嘗ての時代における夫れとはよしんば異るものがあるとして

五

も、さうしてまたこの所謂新らしき立場をいかに現時における政治的要素の強化といふ事象に據るものと認むるとしても、この類の見解は現時における文化のありかたに關してのみならず、また現時における政治や國家に纏はれるひろき意義に關しても充分なる理會を有たざる結果であると言はなければならないと思ふ。現代の文化に關してはしばらく措き、政治や國家の係はり亘るべき領域は今や昔時におけるとは比較し難い程に複雜廣汎となつたのである。たとへ現代國家がいかにその政治力の強度なる凝聚を呈してゐるにもせよ、現代國家は文化の有つひろく裕かなる意義とその作用するところの廣くして深き影響とを無視するが如きことは許さるべくもないのである。したがつてこの類の見解は恐らくは史學理說としても理論の昔時への逆轉であるばかりか、更に政治や國家に關しても正しき理會の上に立たざる短見に基因するものであると言はなければならない。

既に種々述べきたれるが如き意味からして、今や諸々の面において政治的なるものの增强が既成事實であるとしても、歷史は單にひとり政治史あるのみといふのではなく、この分野において根源的に言ふところの政治史と文化史との對立關係はなほその存在を認識せられると思ふ。もとよりその對立關係の意義は舊來の傳統的なる意義のものではなく、上來縷々述べきたりしが如き意義においてであることは言ふまでもあるまい。たとへば嘗て政治史と文化史との對立關係が論議せられたとき、そこでは謂はば優劣といふ樣なことがその重要なる問題の焦點でさへあつた。今やこの樣な優劣も全然その意義を喪つたわけではなく見方によつては依然として、たとへば究極的には兩者の問題の係はるところはその點に歸すといふこともあり得るとしても、しかし尚ほ共問題の焦點

は今はその様なところにはない。國家的なるものや政治的なる力の擴大增强がいよいよ高まりゆくことを認めつつも文化の諸問題が國家的なるもの、政治的なるものの增進のためにも愈々重要なる意義を擔ふものたることが却つて寧ろ明らかに認識せらるべきであるからである。今や政治や國家の面において文化の問題の妥當領域が昔時には見られざる程に擴大もし、且つそこでの問題がそれだけ深く複雜多端にもなつたことであり、したがつてその妥當領域のよりよき開拓や、かく廣き分野に係はりて成りたつ諸々の文化が個別的にも全般的にもよりよき結實、繁榮を呈すると否とは、また政治的なるものの强化發展に影響することますます切實となつた。斯くの如きは事体に關する顯著なることどもを試みに顧みただけであるが、このことによつてもわれわれが現時なほ政治史と文化史との對立關係が新らしき意義において認識せられるとなす所以は分明するであらうかと思ふ。

翻つて思ふにもともと文化とは單なる個人としての人間ではなく、人々の社會的共同活動の上において價値ありとせらるるものの客觀的に表現せられたものを表象する。そこで文化の基底を人類一般の世界性に求めるか、それとも上來みて來たところからして考へられるであらう如く、且つまた特に現時的にますますしか考へられるであらう如く、これを現實的な力としての國民乃至民族において求めらるべきであるかといふ對時的見地が必らずや生ずるであらう。このことは事更その事例を擧ぐるまでもなく現時特に顯著なる現象として明らかであるであらう。然るに寡聞なるわたくしには史學の立場から本稿の課題の究明が企てられるときその場合、問題の採り上げかたに關して、文化の意義についての上示の點を基礎としての理論的討議が企圖せらるる機會に接すること

乏しく、またかかる究明が試みられることがあるとしても、それは理論的に薄弱なものではあるまいかと考へられる。或は之に對して歴史學は普遍的理論を究明する哲學の如きものとは自ら異るものであるからであるといふ解義が述べられるかも分らない。或は歴史學にありては、譬へば史學理論と言ふが如き理論を事更に表面において論考することなく、そのやうな理論の如きは敍述の面においてむしろ顯らはに論議することなく、却つて敍述の展開に當つて、自づから所謂理論による規定を驅使し、それに基きつつ歴史的事象の敍述を行ふことをもつて歴史學の本領とするのであると言はるるかも分らない。特に後者に關してはすぐれたる史家の手になる歴史敍述に接するとき、われわれがしばしば之を感じ、またそれにつき教へらるることである。しかしながらもし斯かることをもつて歴史學の立場においてはそれが常道であり且つそれをもつて事缺がないものであるとしても、歴史が科學として立つことの限り、そこに何らか基礎的理論によつて底礎せられてあるべきものが必要であることは慥かである。

斯様な意味からひとしく文化が問はるるとき、それを世界文化、人間性の理念の表現としての文化の意味においてみるか、それとも國民的乃至民族的文化の意味においてみるかが問題となることは既述の如くである。この兩者はこの問題が詮議せられるとき明らかに分別せられてあらねばならない。さうしてこの兩者のいづれの立場に重點を置いて文化史を形成するかといふことによつて、依然兩者の對立は免れ難いと言はねばならない。茲に新らしい意味における文化史と政治史との對立が成り立つものであると考へられる。前者は政治史として取扱ふ

よりもより世界的な一般的な集團的な立場に重點を求めて究明することをより適はしいとなすものにつける志向であり、後者は文化史の政治的性格化を擇ばふとする志向に立つものである。在來の歴史理論の多くの類のものは單に諸國民乃至諸民族の歴史をとかく個別的に蒐集したといふ様なものか、さもなくば譬へばコムト（Comte）によつて示された様な文化段階説の如き類のものであるかが一般のやうである。前者には歴史の主体性は求められるとしても、その世界性は缺げて居り、後者にはこれに反して世界性は認め得るとしても、主体性はみられない。これでは眞に歴史が歴史としてはなり立ち難く、歴史的存在の成立するためには主体性と世界性とが媒介せられて始めて可能であり能ふと考へられる。從來は民族乃至國民が歴史的主体として自己自身の問題を解決してきてゐたわけであるが、譬へばそれが國家の建設或は戰爭における勝利といふ様なことによつて、その民族なり國民は自づから自己の問題を解決し得てきたことであつた。しかし現時においては問題はもはや一つの民族や國民のうちにおける問題と言ふ様に單純ではあり得ないで、問題の解決は民族乃至國民相互の間における深き媒介の問題として成り立つものであらねばならなくなつたのである。そこでどうしても歴史における主体性と世界性とが兼ね備はらなければ歴史的存在が成り立ち能はないと考へられるのである。(1)國家の本質の問題にしたところで、今日においてはヘーゲルの謂ふ如き客觀的精神の内面的統一態としての政治態といふ様な精神史化されし國家に對して、政治の主体性として國家や國民や民族の問題が採り上げられねばならないことは多言を要すまい。このことは同時に政治の成り立ちが單に國家にのみ限定せられないで、これに聯關して國民や民族の立場が政治

の主体性の問題として捉へらるべきであるといふ要請を擔ふものでもあることを肯定的に承認せしめるであらう。茲では政治が單に文化の一形態としてあるばかりでなく、國民や民族をば文化の中心とすることが考へられる。そして政治について國家が中心的なものの意味において捉へられることが一般であるのは、現實的な國家の力がこの様な意味における文化の統一的中心となることが一般であるといふことを語るものであるに外ならない。

（1）中央公論　昭和十七年四月號「東亞共榮圈の倫理性と歴史性」（座談會記事）參照

故にわれわれは歴史的社會的存在の立場から歴史的世界の構造の契機を求めなければならないことが分明であるであらう。先きに從來の認識論中心の哲學に對して實存哲學の擡頭につき語つた際、われわれは次の様に述べた。即ち、從來の哲學では認識の形式が重視せられたがために認識の特色に從つて認識の問題が取扱はれた。したがつて政治史と文化史との問題においても認識の形式的方法、主としてその方法論上の特色に從つて考へるといふ風であつた。これに對して新らしく擡頭せる實存哲學にあつては存在の特色から認識の特色・方法が考へらるべきであるとせられ、しかも存在は歴史的社會的存在として捉へらるべきであるからして、認識そのものも歴史的社會的存在の性格を有つものと考へられる様になつた。この意味からして歴史認識の問題もまた歴史的存在そのものの問題と離れざるものと考へられるに至つた。今これを政治史と文化史との問題に係はらしめて考ふる

とき、その問題は問題自体の内容をなすところの政治と文化、とりわけ政治的。國家的行動の主体者と文化一般との關係に從つて究明さるべきものとなされるであらう。ところでこの小稿の課題を取扱ふとするとき、單に史學の潮流に從つて問題の推移形成を捉へるといふ様な仕方に止まるのみでなく、更に歴史的存在の構造の上から問題を觀て之を取扱ふべきであらうし、またかくして始めて構成せらるべき理論の基礎付けが眞によく期待せられるのではないかと思ふ。

この意味に即して歴史的存在の構造の契機を求めようとするとき、われわれは歴史的世界は主体と基体と世界との三つの契機を有つものであることに想到する。このことは歴史的存在は主体性と基体性と世界性とを具有しなければ成り立たないといふことを表象する。人間につける種々の哲學的思辨を多く顧みるまでもなく明かであらう如く、人は行爲的主体的存在であり、人は行爲するものである。そこで行爲するものはかく行爲するための基体を有たなければならないが、かかる基体としては先づ原本的には身体が考へ出だされる。主体的存在が行爲。表現的であるといふことは、それが身体的存在であることを意味する。身体は實にその行爲の基体をなしてゐるものである。かく主体が身体を媒介として行爲的。表現的世界につらなるといふことは、他方に身体が圍繞せられ、その中においてそれが生れ生長し、やがて死ぬところの自然的社會的なるものにつらなることを表象してゐる。いひ換れば行爲的主体たる人は生れながらにして環境をもち、この環境によつて特殊的に限定せられ、さうして血緣や地緣を通して共同社會に聯關をもつに至つてゐるものである。ところで基体的存在は身体にせよ

共同社會にせよ、これらはすべて特殊的なる存在として限定せられてゐる。茲に謂ふところの特殊的とは單に一般的なるものの特殊化といふ意味に止まるものではない。特殊は論理的に考ふれば普遍と個体との中間に立つものであり、それ故にそれは兩者の間における動搖の原理である。基体は主体を生産するけれども、そのままでは未だなほ行爲的主体を統一し得るところの原理とはなり能はない。そのためには實に世界を媒介契機としなければならないのである。(2) これらのことを人と現實的な社會との聯關に即してより具体的に考察すれば、行爲的主体としての人は基体としての共同社會につらなることによつて特殊的に限定せられるものであるからして、人は共同社會に對してそれに從屬する構成員となるわけである。茲では人は社會的に義務付けられたる存在の仕方を取るのである。もとより人は自づから行爲的主体であるが故に社會によつて基体的に義務付けられようとも、このことによつて課せられる責任に對する彼のいとなみは、根源的には彼自身即ち個人たる根源によつて果すものに外ならない。しかしながらこの場合彼の責任のいとなみは彼の個人のためであるのではなくして社會的存在そのもののためである。しかし彼はそのためにあらゆる努力を支拂ふとするであらう。かくして彼はその人格を普遍的に實現しようとするのである。かく彼が自己を社會に沒入し、自己を犧牲にして顧みずして努力することは却つて社會の生命に徹して生きることであるが、これは個体と世界とを媒介して始めて可能となることなのである。(3) 斯様に基体性と世界性との關係が殊更に重要なる意義を藏してゐるのであつて、この關係において始めて實は眞によく主体性の存在性格が明かにされるのであると思ふ。かく考へきたれるが如き意味に即して主体性と基体性

と世界性との關係に從つて文化史の成り立ちを觀てゆくとき、文化史の構造や性格は眞によく明らかにせられるものであらうかと考へる。

(2) 務臺理作教授　表現と論理（本書中「哲學の基礎問題」の章）（昭和十五年）參照、特に本書　二五八―二七四頁

(3) 務臺理作教授　前揭書　二六七―七七一頁參照

以上によつて歴史的世界の存立と連續とのためには主体性と世界性との二つの契機が堅く結合せらるることが要請せらるべきであり、かく具はることによつてそれが完ふせられることが明かである。このことからして文化史の成り立ち能ふための條件を考ふるに、基体性として强力なる民族性と媒体性として世界性との兩者が結合して存立しなければならないことが承認せられるであらう。そこで歴史的世界の主体性が求められるとき、それは畢竟民族においてその場が占められるといふことが答へられるであらう。民族は文化の問題として、したがつてまた政治や國家の問題としてひろく問題とせられるものであつて、單にひとり民族學的に之を取扱ふことにおいて盡くるものではない。しかも民族が問題として問はるるとき、民族はしばしば血液や土地や習俗や言語や信仰等々の如く外部的なる與件によつて限定せられるが、しかしそれらの與件はいづれも主觀的に可變的なるものであり、したがつてそれらはいづれも必要なるものではあるが、なほまだ不充分なる條件である。この故にこの様な外部的なる條件をいかに多く加算しても、なほ且つまだ民族を完く限定しおほせるわけにはゆかないのである。

民族について多少でも考究したものにとつては、この様な民族を限定しようとして多くの人々によつて持ち出されるこれらの諸々の外部的なる與件は之をいかに數多く蒐めてみても、結局それは不充分であるといふことを知らしめられるのが常であると言つて差支ない。民族は論理的に言へば特殊である。特殊は嘗て述べし如く普遍でもなく個体でもなく、この兩者の間における動搖の原理である。したがつて特殊は完全に限定せられし限界を有たないのである。民族について言はるる多くの外部的なる契機が結局民族を完く限定し能はない所以は、民族がかく種的性格をもつことに基いてゐる。(4) かく民族は單にひとり外部的には限定せられないでよくこれを條件づけるものは民族の内面的なる自己限定である。恰も自我は外部からは完全に限定せられないで自己の決斷によつてのみよく限定を完ふする如く、民族にとつてもこのことはまた同斷である。民族にとつて自己を完全に限定する所以が内面的自己限定に由るといふことは、民族が單に自然的なるもの、單に基体的なるものに盡きるのではなく、なほ且つ主体的なるものであるからである。民族はこの様な意味で基体的・主体的である。茲に民族が自然的であり基体的であると共に歴史的であり主体的であり、さうしてまた實踐的なる所以がうなづかれる。斯様に民族は單に自然的民族としてのみならず歴史的・國家形成的民族として捉へなければ全きを得ないのである。

(4) 高坂正顯教授　民族の哲學（昭和十五年第二刷）二八―二九頁參照

言ふまでもなく歴史における主体は單に個的なるものではなくして、それは種的なるものであり、種的なるも

のにして初めて歷史を有つのである。單に個的なるものにおいては歷史における連續、聯關、展開等の現象をよく理會せしめ得ないであらう。個と個が互に聯關せられ歷史化されるのも種的なるものにおいてである。それは歷史における基体の面とも聯關する。まことに種的なるもの譬へば民族が歷史の主体たり能ふのは、民族がそれ自らのうちに過去、現在、未來といふ歷史的生成を一体的に包藏し得て存するからである。しかし民族がかく歷史の主体たるに堪ゆるためには民族は國家形成的であらねばならないのである。謂ふところの國家形成的とは民族は外部的なる條件によつては所詮その限定を完ふし得られず、そのためには結局民族に對して自づから國家的自己限定を要求し且つ遂げしむるに至ることを意味する。かくの如き民族を國家形成的民族と呼ぶのである。民族を限定する與件としての諸々の外部的なるものは、既に顧みたるが如くそのための條件として必要ではあるが不充分なるものであつて、實を言へば夫等は民族を限定するものであると共に却つてまた民族によつて解決せらるべき與件である。かうして眞に歷史的世界の主体たり得る民族は、單なる自然的民族ではなくして國家的民族にして始めて其の任務を擔ひ得るのである。(5)

かく考へきたれば民族がよく自己決定を完ふし得て歷史の主体となり能ふといふとき、それはこの様な民族が政治と結び付くことに基くものであるといふことを考へさせられる。われわれは茲において文化の生成發展を示顯するものとしての文化の一々の階梯を考へみれば、それは個人と國家形成的民族乃至國民とが人類の立場における綜合によつて政治に結び付くことによつて建設せられゆくものであるといふことに想到せしめられるであら

う。この意味において文化は一般的に言つて政治を媒介にしなければ成り立ち能はないと言ひ得ると思ふ。[6] かくして文化史の形成、展開が實現し成就せられるためには、そのものが強力なる民族性に結合せられなければならない所以が首肯せられると思ふ。

(5) 高坂正顯教授　民族の哲學（昭和十七年第二刷）一八―三二頁參照

(6) 田邊元教授　歷史的現實（昭和十五年）八五頁參照

しかしながらあらゆる文化が民族に結び付けられなければならず、したがつて文化の民族的形成が文化にとつて避け難い定めであるとしても、文化はまた決して一民族に限局せられるものではない。文化の發展の大いなる動力となるものは民族文化相互間の交流といふ事實に俟つのである。いかなる民族文化も他民族文化との交渉のなかにおいて發展してゆくものであるが、このことは民族が本來複數的多元的であるところからしても當然なる現象である。實を言へば民族文化の發展もさることながら、民族そのものが他民族との接觸交涉をもち、そこに自らの發展を遂げてゆくものであるところに民族文化の發展が他民族文化との交涉に俟つことの深い所以が存してゐるのである。この様に文化における民族的形成や民族的特性は基底的なる事實であるが、他面文化は世界性を持ち得るものであるといふこともまた拒み得ない。まことに優れたる高き文化ほど民族性を帶びて立つとともに、また世界性を有ち得るばかりか有たずしては終り得ないと言はねばならない。いま文化の諸々の形象に亙つ

て具体的に個々にこのことを殊更に點檢するまでもなく、文化につける、また文化における民族性と世界性とは毫も矛盾抵觸するものでないことは明瞭であらう。人はかくの如き文化において眞に高きすぐれたる文化を見出すのである。試みにいま文化史との關係の深きものの一つとして宗教學の問題に事例を求めて考へてみるに、このことは明かに著明であるであらう。宗教學は特別なる說明を俟つまでもなく既に文化史の一部を構成してゐるものであると言ひ得るであらうが、宗教學はそれ自体明かに文化史的性格を具ふると共にそれはまた均しく明かに世界性を有つてゐるものであると言ひ得よう。尤も宗教といふとき特定民族に特有なる特殊的宗教の存在も考へられるが、宗教として大いなる力を有つものは佛教とか回教とかキリスト教とかいふ如き世界的宗教である。そこでは特定民族とか特定國民だけに關する特殊的宗教としての態様において之を捉へることによつて之を正しく理會し得るわけにはゆかず、必ずや全体との聯關において、或はまたある特定の民族乃至國民における特殊的態様と他との相互的比較的且つ綜合的研究が試みられなければならない。これは別段多くの解明を必要としないほど明かなことであると思ふ。さうしてこれは單にひとり宗教に限つて特有なる現象ではなく、科學にせよ藝術にせよ、その他諸々の文化に關しても同斷である。實に眞にすぐれたる高き文化であればあるほど、それは單に特定的民族の圈內に止まらずしてそれを超えてひろく世界的なる性格を自づと具へたるものであると考へられる。いひ換れば各々の文化にして眞に卓越せるものとなり能ふためには斯くあらねばならないとも言ひ得るであらう。もとより科學も一定の歷史的社會的地盤において成り立つものであるが、しかし科學はそれ自身としては

どこまでも客觀的普遍的なるものであらねばならない。實に科學の科學たり能ふのはよくその歴史的社會性を超えるところに、且つまたよくそれを超えうる限りにおいて認證せられる。近時强調せられる日本的科學と言はれるものもそれが單に日本人によつて、また日本においていとなまれる科學といふに止まるべきではなく、それが科學たる限り何人によつても何處においても均しく實證せられるものであらねばならない。科學の科學性はむしろあらゆるその擔持者から獨立し得るところに存する。(7) そこにこそその科學の確かさと裕かさとがある。この故にひろく文化は世界性を有つと同時にその解明は飽くまでも科學性を有つべきである。もしこの場合科學性を喪ふか、それともまた殊更に之を拒むが如きことがあるとするならば、それは文化史にとつて不可缺なる世界性を我れと我れから否定し去ることに歸するであらう。

(7) 下村寅太郎氏　科學史の哲學（昭和十七年再版）二八四頁參照

われわれは以上の如くして歴史的存在にとつて民族性と世界性との二つの契機は共に結び付いてあらねばならないものであり、そのいづれの一つを缺いでも歴史の成り立ち難いものであることを知り得ると思ふ。さうしてこのことは原本的には政治史と文化史との問題に歸着するであらうが、この課題こそはまことに昔ながらの問題であり、時代の進展とともにその對立關係に纏つはる理論も複雜にもなり變化もしてきたことであつた。しかしわれわれは文化の問題をいかに取扱ふかといふことによつて政治史と文化史との對立關係は依然消えうせないも

のであるといふことを學んだと共に、更にそれが現時的にいかなる意義を擔ひつつ對立關係に立つと觀想せらるるかについて、いささか考究し得るところがあつたかと思ふ。（一九四三、一一、一〇）

附記

故京城帝國大學教授奥平武彦君の永眠くらひ近時われわれを驚かしたものはなかつた。われわれの悲しみもまたこの驚きに深くより添ふものであつた。我が九州帝國大學法文學部は久しく政治史、外交史の教授を缺いたままに年を經てきたことであつたが、同教授に城大との兼擔において本學にもお働きを願ふこととなり、各方面との諒解も得てその發令をみる日も既に豫定せられ、われわれは茲に年來の渇望を充たし得るといふ深き大きなる喜びと期待との下に、本年六月には本學における講義の日を期して待つてゐたのである。然るに同君はそれを目前に控へて數日の病氣により忽然として急逝せられた。實は筆者は五月中旬以降京都帝大法學部へ出講中故人御令室樣より同君が急なる大患に惱みつつあるといふ御音信に接した。そのうちには同君が病床に高熱の苦痛と闘ひつつも本學への出講を絶えず懸念せられ、譫言にもそれを漏らさるるとも記してあつた。責任感の強い同君の日頃の姿を思ひ浮かべ、且つ本學にての講義のためにあの凝性の同君があの上にも丹誠していかに充分に準備されたであらうかといふことが、折から求められて他大學への出講中の旅空の筆者には自らの乏しき準備に引きくらべて身に泌みて偲ばれたことであつた。しかし日頃の同君の頑健を知つてゐる筆者はその恢復を切に祈りつつ、なほ全快の日の來たることを信じて疑はなかつた。その通信を得た二日後、即ち五月二十六日京大にての講義も終り、同夜筆者は急遽歸途についた。翌朝六時下關驛プラットフォームにてゆくりなく求めた新聞紙に洵に思ひもうけず同君の急逝の悲しき記事を讀まねばならなかつた。その驚きと悲しみとは譬へ樣もなかつた。御遺族の方々の御愁傷と御力落しに至つては言ふべくもない。さうしてまた城大は洵にかけがへもない優れたる學者にして、人

々の敬愛を深く蒐めし尊き同僚をかくもあつけなく喪つてしまつたと言ふことにつき洵に言ひ知れざる感慨に包まれた。さうしてこれはまた本學にとつても均しく同樣であると一瞬にして感得したことであつた。上記の如く我が學部は同君を暫く迎へてまさに政治史の講義を始めて頂くばかりになつてゐた。われわれは六月には學生に對して是が非でも政治史の講義を行はねばならなかつた。しかも學部の事情としては時日は切迫して居り、且つ餘りに突發的に他大學に講師を依頼することは失當でもあり、つひに最も不適任なる筆者が此度だけは臨時講義式にこの講義を何とでもして試みねばならなくなつた。筆者にとつて政治史は未だ嘗て講義したことのない科目であつたにも不拘、敢へて之を引受けねばならない程事情は他に路を許さなかつた。私事に亘り洵に非禮であるが一言所懷を述ぶることを許されるならば、奥平君の愼ましくも堅き學的態度に勵まされ、また同君への深き追慕の念が筆者にその講義を引受くるの決意を與へたものであつた。しかし淺學にして周準備を缺げる身は貧しい講義しか出來なかつたことは自ら最も良く之を知り且つ慙愧に堪へないところであつた。もともと歴史にも哲學にも門外者にして理會乏しい筆者は、この小稿の課題についても何ら寄與するところのないことを知つてゐるが、小稿はこれを機緣にあはたゞしくもいささか思索し讀書して考へさせられし一つの課題につける一つのささやかなる貧しき收穫である。貧しさと未熟さとをそのままこの道の優れたる學者にして、また筆者の尊敬おく能はざりし學友であつた故奥平君の靈に謹みて捧ぐる次第である。